

発行：株式会社北海道しんきん情報サービス 〒060-0032 札幌市中央区北2条東7丁目 HBAシステムビル TEL.011-233-1212(代) FAX.011-261-1811



## 新年のご挨拶

株式会社北海道しんきん情報サービス  
代表取締役社長

武田 大二郎



令和5年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年も国内外問わず、たくさん大きな事件・事故、そして時代が激しく変化していくうねりを感じながら、あっという間に1年は過ぎていきました。

新型コロナウイルス感染拡大は、ここまで長期化するトピックスにはなりませんが、しかし今もその影響を受けながらの生活は変わっておらず、雰囲気としては相当緩和されているとはいえ、2類相当から5類に分類変更でもされない限り、本当の意味でのコロナ禍からの脱却にはならないと誰もが感じていることでしょう。

そのような中でも、イベント開催については制限緩和となりましたので、弊社も4年ぶりの展示会「北海道しんきんネットワークエキシビジョン2022」を11月に開催し、久し振りにリアルで多くの方々と接しました。

札幌では、同日に 北海道 技術・ビジネス交流会である「ビジネスEXPO2022」が、その前に東京ではしんきん情報サービス(SIS)が「しんきんコミュニケーションフェア」を久々に開催し、いずれも熱気と活気溢れる雰囲気の中、盛会裏に終えたというのは、引き籠ってリモートでの生活を強いられていたことの反動もあるのだろうと感じたものです。

ビジネスEXPOのテーマは「不確実な時代が続く今、挑戦を恐れず“北海道からイノベーション創造”を」でしたが、まさに籠ってばかりでは何も生まれない、進まない。「挑戦を恐れず」という気概を持って取り組んでいかなければ先はないと改めて思いました。

ただし、勢いばかりでの取り組みはもちろん意味をなしません。世の中には、それっぽいことを言つていれば、それこそ何となく「挑戦」して取り組んでいる感を与えます。例えば二言目には「DXの推進」を口にする傾向がありますが、

手段であるはずのデジタル活用が「目的化」てしまっている企業が多いと言われています。DXのD(デジタル)はX(変革)のための手段の一つでしかない、優先すべきはXであるということを、改めて認識することが大事なのでしょう。新型コロナウイルス禍の閉塞感打破への期待もあって、DXは「ブーム」になっていると評する有識者もいます。本質を見失うことなく、地に足のついた取り組みを行っていくことを大事にしたいと考えます。

さて、弊社の昨年はと言いますと、これまで帯広信金増田前会長の下、相当長期間にわたってほぼ同じ顔ぶれで取締役会を構成しておりましたが、6月の役員改選で久し振りに大きな動きがあり、非常勤取締役の半分の方が交代しました。前取締役の皆様には本当に温かいご理解とご支援をいただき、感謝の念に堪えません。今後はまた、心機一転、心新たに前進していく所存です。

当社の存在意義は、毎度言っていますが単純明快、「信用金庫のお役に立つこと」です。ただし誤解を恐れず言うならば、メーカーが同じように言うこの言葉とは深度が違うと思っており、それはつまり道内信用金庫と当社は運命共同体であり、信用金庫の発展無くして当社の発展もあり得ないですから「お役に立ちたい」の意味は、事実として自らに跳ね返る深いものです。信用金庫の経営状態が当社の経営に直結するわけですから、個別メーカーが求める利益と、当社の姿勢は全く違うところにあるということを、これからもきちんと理解していただけるよう活動したいと思っております。

今後も全道全信用金庫が、本当の意味で当社を業界の一部組織として認知し、利用していただけるように尽力してまいりますので、本年も倍旧のご支援ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。



## 新年のご挨拶

株式会社北海道しんきん情報サービス  
システム検討委員長

山本 広幸 (帯広信用金庫 事務部 部長)



新年あけましておめでとうございます。

新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

さて、私は、昨年8月にHSIS様主催システム検討委員会委員長を拝命いたしました。前委員長の道南うみ街信用金庫 理事長 田原様におかれましては、長きに亘り当委員会の運営にご尽力いただき、大変お世話になりましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

顧みますと、私が平成24年に旧北海道信金共同事務センター時代の「システム専門委員会」に初めて参加させていただいてから約10年になります。その間、共同センターの統合により「システム専門委員会」は、平成26年からはHSIS様主催となり、その後、平成29年には金庫役員様が中心であった「企画委員会」との統合を経て、現在の「システム検討委員会」となっております。

同委員会は、「単独では難しい」各種システムの導入・共同利用や、金庫内部業務のHSIS様への外部委託にかかる検討を行うほか、道内信用金庫間の情報交換の場としても大きな意義があります。

昨年も新型コロナウイルス感染は収束せず、夏場には第7波感染拡大、その後一旦は減少傾向が見られたものの、11月に入って再び拡大し、北海道においても1日あたりの感染者数が過去最多を更新するなど、引き続き私たちの日常生活や仕事に多大な影響を及ぼしました。

このことに加え、ウクライナ情勢の悪化に端を発する世界経済の混乱、中国ゼロコロナ政策の長期化、日米金利差の拡大による円安の進行により、

物価上昇を始めとして多くの悪影響が日本全体に及んでおります。

このような非常に厳しい経済情勢の中、道内信用金庫の役職員の皆様におかれましては、お取引先の生活や事業活動を支えるべく、資金繰りや各種支援に多くの時間を費やされているものと思います。また一方では、マネロン・テロ資金供与対策(AML・CFT)として求められている継続的顧客管理への対応などが大きな負担となっております。

顧客サービスの維持・拡大や、制度対応への取り組みを円滑に進めるためには、従来業務も含めて更なる業務効率化は共通の課題であると考えられます。国内では、多くの金融機関が数年前から「ICT(情報通信技術)」を利用して「FinTech(フィンテック)」や「DX(デジタルトランスフォーメーション)」をキーワードとする様々な取り組みに着手し、新たな顧客向けサービスの提供や各種制度対応、業務効率化を積極的に進めています。こうした取り組みは、例外なく信用金庫業界でも進められておりますが、システム要員やコストの関係上、単独では導入が難しいシステムも多いのが現状です。

北海道地区は、他の地区よりも信用金庫間の連携が強いと言われております。今後も、当委員会は勿論のこと、HSIS様主催の各種会議体あるいは説明会や情報交換会などを活用し、道内信用金庫共通の課題解決に繋がる活動を微力ながら進めて参る所存です。

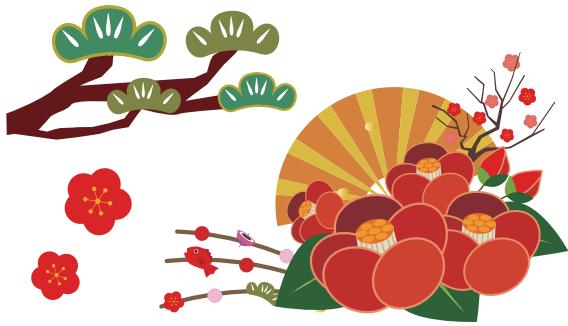
結びになりますが、新しい年が皆様にとりまして輝かしい一年になりますことをご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



## 新年のご挨拶

株式会社北海道しんきん情報サービス  
システム検討副委員長

戸島 隆志（遠軽信用金庫 常勤理事）



新年あけましておめでとうございます。

令和5年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申しあげます。

昨年は、北京冬季五輪で過去最多の18個のメダルを獲得するなどの華やかなニュースがあった一方、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、これを契機とした資源価格の上昇や物流の停滞等を目の当たりにすると、国際平和とは危うい均衡のうえで成り立っていたことを改めて考えさせられた1年がありました。

金融機関を取り巻く環境に目を移しても、急速な円安と物価の上昇、世界的な動向から隔絶されたかのような超低金利の金融政策長期化など、明るい話題とはほど遠い状況にあったと感じる方々も多かったのではないでしょうか。

さて、私自身は、令和4年8月開催のシステム検討委員会において副委員長という大役を拝命いたしましたが、知識・経験ともに十分ではない人間がお受けして良いのかと思い悩んだものの、諸先輩方の熱いエールに背中を押され、選任をいただき現在に至っております。また、関連する組織として、しんきん共同センターが設置・運営している「次期システム検討会議」の下部組織である「業務系・情報系システム分科会」の構成員として、現行の「業務系システム」の更改に係る議論に参画させていただいております。

昨今のデジタル化の進展は、コロナ禍という悪夢のような環境ですら材料にしながら目覚ましい発展を続ける一方、ランサムウェア等のサイバーキュリティ問題や非対面による業務の弊害も見えてくるなど、功罪両面で対応すべき事項が山積しているのが実態だと思います。

これまででは業務の効率化や顧客利便性の向上という観点で進めてきたシステム化ですが、金融業に携わる者として「安全・安心」の大原則を順守しつつ、デジタル社会への対応というミッションに取り組む必要があります。

進展したデジタル化、言い換れば「便利さ」を退化させることが難しいのが現実であり、これらのバランスを取りながら、地域金融機関の使命でもある金融インフラの維持をどのように具現化していくのか。

デジタルとアナログの双方に知見をもった人材を育成し、地域とともに考動する。まさに、信用金庫の本領が發揮できる分野と言えるのではないでしょうか。

諸説ありますが、世の中にスマートフォンが普及して15年程度しか経っていません。今、我々が対峙している課題はこの先15年というスパンで見た際に、どうなっているのか。振り返れば「そんなこともあったよね。」という程度のものかもしれません。スピード感を持つつ、将来のあるべき姿を創造し具現化することが重要だと考えております。

門外漢のような私が、副委員長という大役を仰せつかりました。システム側からの見方だけではなく、実際に利用するユーザー目線であったり、その先にいるお客様の目線であったりと、幅広な提案や議論の一助となれるよう微力ながら力を尽くす所存でありますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひいたします。

結びになりますが、新しい年が道内信用金庫並びに役職員の皆様にとって、輝かしい1年となることを祈念申しあげ、新年のご挨拶とさせていただきます。